

巨大津波の痕跡と霧多布湿原



去の巨大地震津波の痕跡を堆積物から調べたものです。

*霧多布湿原の成り立ち

霧多布湿原の泥炭の下の地形は、海蝕崖が存在し、約七千年前は現在より三メートル海水面が高く、以降海岸線が徐々に前進し、今から約三千年前に現在の海岸線に到達したものと考えられています。

霧多布湿原の表層を構成する泥炭層は、泥炭の層圧が0.7〜2.6メートルで、三千五百年間にわたって堆積しました。こうした湿地の土壌条件、水分条件は高山植物の群落形成には好都合で、ミズゴケ類、ツルコケモモ、エゾイソツツジ、ガンコウランなどが繁茂している。大正十一年には、霧多布泥炭形成植物群落が天然記念物として指定されています。

*なぜ津波堆積物を調べるのか

過去の地震は、地震災害よりも津波災害の方が遥かに大きく、地震の大きさ、繰り返し間隔、津波の遡上規模を知ること、防災地図（ハザードマップ）の基礎データとなります。道東では、十九世紀以降、西日本では五世紀以降の歴史記録が存在し、堆積物を用いて史実を裏証することが可能となります。

有史時代以前の津波の調べ方は、堆積物から推定するしか方法がありません。霧多布湿原のほか、厚岸町の史跡国泰寺前でも調査が行われました。国泰寺は、一八〇四年に建立され道東でも最も古い寺院で、国泰寺の住職が記した日鑑記にも天

保十四年（一八四三年）の地震津波の記述がされています。国泰寺前では、シヨベルカーを使って掘削し歴史津波の史実を町民が見ることができました。



昭和35年のチリ沖地震津波

*霧多布湿原の調査

霧多布における津波被害は、昭和二十七年の十勝沖地震津波、三十五年のチリ沖地震津波で二度の大きな被害を被り、その後も、幾度かの地震災害に見舞われ、町民は常に津波災害の恐怖に脅かされています。霧多布湿原での調査地は二カ所、今回は霧多布湿原MGロード沿いの泥川附近で行われ、町民に一般公開されました。

調査結果から、十世紀以降に生じた上位四層の分布範囲は、十七世紀および十三世紀の津波痕跡は海岸線から三キロメートル以上で、二十世紀から十九世紀の津波の痕跡は海岸



霧多布湿原MGロード沿いの泥川附近で採掘

線から一キロメートル以内であることが判明し、現海岸線から数キロメートル程度津波が遡上し、道東太平洋沿岸各地で同じ層序が確認されています。発生間隔は四百〜五百年程度で発生して、我われの良く知っている二十世紀のプレート間地震とは明らかに異なる巨大地震が発生しています。

現在の霧多布湿原の成り立ちには、この地で発生する地震津波が大きく関与しています。霧多布湿原には八層の巨大津波の痕跡が残されており、それらは約五百年間隔で生じる十勝沖と根室沖地震の連動が原因と考えられています。

現在、地震発生メカニズムが解明されて、地震波の分析で津波予報が出されています。過去の経験したこともない津波の痕跡を知ること、日ごろから防災意識を高めてほしいものです。

十月十日総合文化センターで、巨大津波と霧多布湿原と題して、防災講演会が開催されました。

この講演の講師として、地質学者でもあり、現在は独立行政法人の産業技術総合研究所活断層研究センターで活躍されている理学博士の七山太氏を招いて開催しました。

同氏は、堆積物を用いた古津波履歴の研究を行い、平成五年の北海道南西沖地震津波の痕跡調査の成果に基づき、堆積学的手法を用いた古津波履歴の研究方法を確立しました。

その研究手法に基づき、一七四一年渡島大島噴火津波の痕跡を熊石町鮎川海岸で発掘し、史実を検証しました。千島海溝沿岸域においても、過去九千年間に二十一回、ほぼ五百年間隔で巨大地震津波の襲来履歴や遡上規模を明らかにしました。

今回、霧多布湿原の成り立ちと過